

夢霧散 やるせない



県内球児「有終飾る大会を」 指導者ら

第102回全国高校野球選手権の中止が決まった20日、聖地・甲子園への夢が霧散し、やりきれない思いと落胆が県内の球児や指導者の間にも広がった。親元を離れ、白球を追い続けた3年生も少なくない。地方大会の中止も決まり、関係者からは、ユニホーム姿で有終を飾ることができず、代替大会の実施を求める声が多く上がった。

夏の甲子園10日出場の八... 学光星は20日午後、八戸学院大の室内練習場で練習を行い、仲井宗基監督が約110人の全部員に中止を伝

「簡単に気持ちを切り替えられないかもしれないが、乗り越えなければならぬ。野球が好きなら、新たな目標を

見つけよう。指揮官の言葉も、部員たちは沈痛な面持ちでかみしめていた。

2年連続で夏の甲子園切符を手にした同校だが、昨秋の県大会ではまさかの1回戦コールド負け。雪辱を誓った部員たちは、冬場にウエートトレーニングなどの地道な体づくりに励み、今夏を目指してきた。

20日の練習では、瞳を潤ませてバットを振る部員の姿も、3年の中澤英明主将は「打の光星」と呼ばれるにふさわしいチームに成長した実感があるだけに、ショックだし悔しい」と心境を吐露。仲井監督は「親元を離れてきた子も多い中、甲子園を目指してきたからと、じつは練習にも耐えられた。今後の人生のため、コロナ対策に万全を

夏の甲子園大会の中止が伝えられ、悔しさを表情で仲井宗基監督（左手前）の話を聞く八学光星の野球部員＝20日午後、八戸市

期した上で地方大会を開催してほしい」と切望した。18、19年と県大会決勝で

涙を流した聖愛、原田一範監督は全国に漂う自粛ムードに触れ「感染リスクの対策を講じ、開催できるようにはいかない」と、日本全体にいろんな問題が出てくる。高校野球に携わる大人として、県独自の大会を開

き、社会に「大会が開催できる」という影響を与えていく社会的責任がある」と提言する。過去11回、夏の甲子園出場を果たした青森山田の児森崇朗監督も「各校の選手が、今まで磨いてきた技やチームワークを発揮できる大会を開いてあげたい」と同調した。

県高野連は地方大会に代わる大会の実施を検討中。青森北の林永遠三塁手（3年）は、気持ちの整理は難しいとしながらも「県の大大会開催を信じて仲間と一丸となって、悔いなくプレーする」と力を込めた。

昨夏の県大会で12年ぶりに4強入りした青森商。秋田幸生監督は「どういう形でも受け入れよう」と事前にも部員に伝えていたが、中止を伝えた際、3年生の表情は暗かったという。代替大会について「できる限り例年の青森大会に近い形で開催してほしい」。

球児として、指導者として甲子園の土を踏んだ三沢商の浪岡健吾監督。普段は消防業務に携わり、生命の